

地球文明を目指して…森林破壊と仏教の文明論

山本修一

一 はじめに

本年（二〇〇四）七月にブラジルのアマゾンを観察する機会を得た。マナウスからセスナ機に乗り、アマゾンを上空から見た。このあたりはまだ森林破壊はそれほど進んでいるわけではなく、ブロッコリーを敷き詰めたような緑の絨毯が地平線の果てまで続くような光景を目にした。アマゾンが地球の肺と形容されること、まさに的を射た表現であることを実感できる思いであった。しかしこのあたりにも所々で森林の空白地

帯があること、また真つ直ぐに引かれた茶色の道路が、これまた地平線のかなたまで続いているのが見え、道路の周辺では森林伐採が進んでいるのも確認した。

マナウスから南へ三百キロのところにある小さな村を訪ねた。そこで見た光景には驚いた。すべての家ではないが、天に向けて大きなパラボナアンテナが設置してある。聞くと、これでテレビを見ているという。電気が通じていないところでは、自家発電機でそのための電力を得ている。そしてそこでは冷蔵庫や洗濯機まで使っていた。

村から車で三十分ほど森林に入っていくと、道路の脇には切り倒した大きな木の丸太が至るところに置かれている。これをトラックで運んでいる人たちにも出くわした。現地の人の話では、これらの木の伐採は誰にも止めることはできないという。木を切り出して、それを売って電化製品を買い、生活の糧にしているからである。

マナウスで世界的に著名なアマゾンの詩人、チャゴ・デメロ氏に会った。彼は、アマゾン是世界の遺産である前にブラジルの遺産であることを主張している。そして先祖伝来の薬草などの知識を国際特許などの国際的な権利を通して、現地の人々の利益を確保しようとして無闇な森林伐採の反対運動を展開している。しかし、地元の人々にそれを説くことによって、襲われそうになったことも幾度もあるという。つまり、今のところ自分たちが利益を得る方法が木を切り出す以外に無いところで、いかなる権利でそれを止めよと言うのか、邪魔する人は誰であれ許せない、ということらしい。

者の一致した意見として述べられている。

森林破壊をはじめとする自然破壊は、自然という資源を失うだけではない。生態系の崩壊も意味する。さらに重要なことは、人間がこれまで豊かな自然と共生していたなかで培ってきた多くの思想や知恵を失うことと考える。それらは東洋思想と深く関わっていると考えられる。そこで本論文では、森林破壊をはじめとする自然を失うことの文明的な意味を、東洋思想、主に仏教の視点から考察したい。

二 森林破壊の現状

近年の自然破壊の規模は空前のものになってきている。自然破壊は、森林破壊、砂漠化、海洋生態系、極域、水資源の枯渇、洪水など、多岐にわたるが、ここでは、その現状の一端を『地球環境報告Ⅱ』（石、一九九八）や『ワールドウォッチ研究会、地球白書二〇〇四—〇五』（クリストファー・フレイヴィン、二〇〇四）から、代表的な森林破壊だけを抽出して、述べることにする。

現在は人類の歴史の中でもっとも豊かな生活を楽しんでいる時代である。この多くは科学技術によっている。その一方で、世界の至る所で森林伐採をはじめとする自然破壊が大規模に行われている。それはまさに暴走といってよい。それを止める手段は現在のところ見出せていない。このままの状態が続けば近い将来大きな影響が出てくるものと考えられる。科学技術文明は自然征服型の文明であり、西洋からもたらされたものである。季、蔣、池田による文明でい談『東洋の智慧を語る』（二〇〇二）では、①中国古代からの「天人合一」思想と仏教の「依正不二」思想は、大自然と人間の関係を表し、一致した思想であること、②古代の東洋思想、たとえばインドの「梵我一如」や中国思想の影響の大きい韓・朝鮮半島の「天地万物の理」なども「天人合一」思想と同一の思考であること、③西洋が分析型の思考であるのに対して、東洋は総合的思考であることなどから、④混迷を極める現代文明を西洋の人間による自然征服型の文明から、東洋の人間と自然との調和型の文明への転換が必要であることが、三

アマゾンの森林破壊はよく知られている。たとえばブラジル、 Rondônia 州はかつて九九・八%が森林であったが、現在では七八・八%に減少している。これは主に開発によるものである。アマゾン全体では、一九七四年から一九九六年の間に約三千七百万ヘクタールが失われている。これは丁度日本の国土面積に相当するものであり、これだけでも想像を絶する森林破壊が起こっていることが理解できる。近年起こっている森林破壊で無視できないものが森林火災である。なかでも一九九七年は世界自然保護基金(WWF)が『地球が燃えた年』と表現した報告書のタイトルが示すように史上最悪の山火事の年であった。インドネシア、マレーシアだけでなく、ブラジルやコロンビアのアマゾン、アフリカのケニア、タンザニア、セネガル、コンゴでも森林火災が発生した。なかでもカリマンタン島(インドネシア領およびマレーシア領)では約三百万ヘクタールの森林が火災で消失した。また、マレーシアやインドネシアで起こった森林火災による焼失面積も、約三百万ヘクタールである。これらは日本の国土面積の

八%にも相当する規模のものである。なぜこのような大規模な火災が起きるのか。この年は、エルニーニョの発生で異常乾燥が続き、森林火災が拡大したことも規模拡大に拍車をかけることになった。またパプアニューギニアでは、二十年以上にもわたって日本企業が木材を伐採し続け、緑を失い、そのため乾燥化がすすみ、火災が発生しやすい状況になっていた。そして、火災の直接的な原因としては、一度に何百ヘクタールも森林を焼いて切り開く大農園の造成と、そして搾取されている農民による放火である。そのうえ近年の開発の波に乗って、焼き放題、切り放題の状況に加え、労働者のタバコ、炊事の不始末、炭焼きの失火、最近では放火も加わるなど、まさに人災による。タイは、国連環境計画 (UNEP) が、エチオピア、バングラディッシュ、ペルーなどと並んで、緊急の環境保護対策を要請している「生態系の崩壊」地帯に指定されている。そのタイでは、一九六一年国土の四二%が森林だったが、現在では一三%になり、五〇〇万ヘクタールを失っている。それに伴い、降雨量も一三〇〇mmから七〇

〇―八〇〇mmに減少している。その他、フィリピンでも一九九八年に四万二〇〇〇ヘクタール、中国北部で一九八七年山火事で七二〇万ヘクタール、モンゴルでも一九九六年九五〇万ヘクタールが森林火災で消失している。こうしたことから、世界の熱帯雨林は一九六〇年から一九九〇年の三十年間で約二〇%が失われ、特にアジアでは、農耕開始以前の八千年前から現在までに八八%の森林が消失されたと推定されている。

これら自然破壊とともに進行している現象が、都市化や科学技術の産物の浸透である。国連の人口推計によれば、一九五〇年には世界人口が約二十五億人であったが、二〇〇〇年には二・四倍の六十億人となった。この間、都市人口も急激に増加している。一九五〇年には約八億人、世界人口の約三〇%であった都市人口が、二〇〇〇年には三・六倍の二十九億人、世界人口の約四七%となっている。都市人口は今後さらに増加し、二〇一〇年には世界人口の五〇%、そして二〇三〇年には六〇%が都市に居住すると予測されている。このように世界は急速に都市化しつつあるが、特に途

上国の都市人口の増加が急激に進んでいるところにその特徴がある。そして同時に進んでいるのが、科学技術の産物である車や家電製品の普及である。これは、たとえば車の保有台数は、一九五〇年代に世界で七千万台であったものが、一九九九年の五十年間で約十倍の六億八千万台になった(クリストファー・フレイヴィン、二〇〇四)ことに象徴的に現れている。これも特に開発途上国での増加が著しく、そして都市には科学技術の産物があふれてきていることを示している。

このようにして世界的な規模での森林破壊や自然破壊が起こっている一方で、世界的な規模で人間は都市に集中し、そこは科学技術の産物で占められているのである。

こうした現象が起こる大きな原因は、人口の増加と経済のグローバル化である。農業の変革による生産量の増加や医療の発展による乳幼児の死亡率の減少といった広い意味での科学技術の発展もそれに拍車をかけている。人口が増加すれば、当然消費の増大をもたらす。そしてその一方で、国際的な企業が進出し、経済

のグローバル化が進んでいる。経済のグローバル化は、貨幣価値の一元化であり、国際的な立場での貨幣の価値が意味をもつようになる。先進国は途上国から自然資源を安く買い入れ、高い製品を売りつけるといった構造が出来上がり、その結果、貧乏な国はますます貧乏に、豊かな国はますます豊かになる。かつて先進国では、国内に豊かな人と貧乏な人がいたが、現在は貧乏な国を外に作り出すことによって、豊かな国を維持している。産業の発展が遅れている貧乏な国では、木材や水産物などの自然資源を売ってお金に変える方法が最も手っ取り早い。したがって自然資源の消費を進める。その仕組みが国際的にできてきたことを称して、経済のグローバル化といっているのである。

このような状況下に置かれている途上国の人々に、今世界的に自然が破壊されている、それを止めない限り人類は地球で生息できなくなる、と説いても、何の効果もない。先に述べたように、その日の生活にも困っているような農民に、木を切るな、森林を守れといっても無理な注文であることは容易に理解できる。ゆ

えに、われ先にとという原理が働くのは、当然のことといえるであろう。ましてや、将来の世代にとつてのことなど、考える余裕など、微塵もないといつても過言ではない。その結果、世界は貪欲な怪物と化し、まさに現代の文明は、「暴走している」のである。

このような状況は、仏教の時代観・文明観というべき「五濁」の「劫濁（時代の濁りを表し、文明が滅びること）」に相当する様相である。五濁は、「劫濁」、「見濁（思想の濁り）」、「煩惱濁（貪欲など命の濁り）」、「衆生濁（人間全体の濁り）」、「命濁（生命力が弱まり、寿命が短くなること）」からなる。天台の『法華文句』（巻四下）によれば、「煩惱と見とを根本と為す」とあるように、人間の「煩惱濁」と「見濁」から、「衆生濁」、「命濁」に至り、そして時代全体の濁りである「劫濁」が生ずるのである（山本、一九九七）。すでに現代はさまざまな欲望が渦巻いており、自然破壊を伴う「煩惱濁」によって世界は席卷されていると捉えることができるだろう。蒋忠新は、『東洋の智慧を語る』（季・蒋・池田、二〇〇二）の中で、仏教で説く「貪、瞋、癡」の「三毒」に触れ、

「貪」を第一に位置づけていることは全く正しいと述べ、さらに『二十一世紀への対話』（一九七五）でのトインビー博士の「現代人の貪欲さはまた、かけがえのない資源を消費し尽くして、未来の世代から生存権を奪おうとしている」との意見を引用し、貪欲の抑制こそ全人類にとって、永劫の指導的意義をもつていると述べていることは、仏教の「五濁」から見ても、文明の転換にとつて重要な指摘である。

三 文明の盛衰と森林破壊

近年の古代文明の盛衰に関わる研究では、森林破壊によって文明が滅んできたこと、そして環境の厳しいときに新たな文明が興えることが明らかになってきている（安田、一九九六）。森林破壊によって文明が滅んできた例には、メソポタミア文明、ミノア文明、ミケーネ文明などがある。古代メソポタミア文明が滅びた原因は、人類最古の物語『ギルガメッシュ叙事詩』（梅原、一九八八）に語られている。メソポタミア地域はもともと森林は少なく、ユーフラテス川の上流地域において紀元前

二六〇〇年前頃、ギルガメッシュ王は半神半獣の森の神フンババを倒し、レバノン杉を伐採する。この大規模な森の破壊によってメソポタミアの都市文明は発展した。しかし、文明を維持するには木が必要不可欠であった。神殿を建てるにも、交易の船を建造するにも青銅器や土器を焼くにも、また調理にも木が必要である。やがて、その供給源の森林が失われることによってメソポタミア文明は滅んだことが推定されている。また紀元前二〇〇〇年前に栄えた地中海文明のひとつミノア文明の盛衰にも森林が関わっていることが示唆されている。ミノア文明の中心地、クレタ島は、南部メソポタミアが深刻な木材不足に陥っていたころ、豊かな森林に恵まれていた。そしてミノア文明はその豊かな森林資源を背景として栄えた。これまでミノア文明の崩壊は地中海の小島・サントリーニ島の火山噴火によると説明されてきたが、島国の森林資源は許容量が小さく、短期間に使い尽くされ、そのためにこの文明は滅びたものと推定されている。その結果、現在のクレタ島は禿山になった。また、ミノア文明が滅んだ

後、紀元前一五〇〇年頃に台頭してくるミケーネ文明もまた豊かな森林資源に支えられて発展してきたと考えられている。紀元前一三〇〇年ころ、ミケーネ文明は栄え、人口も急増する。人口増加によって農耕地の開拓が大々的に行われ、建築材や燃料の消費も著しくなり、森林破壊が急速に進んでいった。ミケーネ文明が滅びた要因はこれまで北方からのドーリア人の侵入によるとされてきたが、滅んだ第一の原因は、森林破壊による土壌の劣化とそれに追い討ちをかける気候の寒冷化によって薪や食料不足が起り、さらには飢えと体力の低下が都市の崩壊につながったものと考えられている。このようなことから、安田（一九九七）は、文明の滅亡には森林資源の枯渇と森林破壊が大きく関わり、森が滅ぶとき、国（文明）が滅ぶと結論している。

その一方で、環境の厳しい地球の寒冷化や砂漠化の時代に新たな文明が興っていることも安田（一九九六）は指摘している。およそ一万年前のヤンガー・ドリラス期の寒冷化が逆戻りした時期に、麦作農耕を開始し

たのが第一の寒冷化、砂漠化の時期である。第二の時期が五千年前、気候最適期の終焉の時期で、この時に都市文明が誕生している。そして三千年前の第三の砂漠化の時期に一神教が誕生した。十五世紀、第四の寒冷化、砂漠化の時期には、ヨーロッパでは森林資源が枯渇し、新大陸を求めていく。この時期は小氷期の時代で安田（一九九七）が「森林破壊の文明」と呼ぶ地球支配のはじまりである。そして現代は第五の砂漠化の時期で、これは森林破壊だけでなく、人為的な地球の温暖化も関わる。文明の良し悪しは別にして、こうした気候の寒冷化、砂漠化の厳しい時代に新たな文明が生まれているといえよう。

四 自然の豊かさの維持のための思想や知恵

これら文明が減じたことの原因は、森林破壊であるが、これは直接的な資源の減少によって、文明自体が生きるすべを失い、減んでいったものである。森林を失うことは、こうした直接的な資源を失うことでもあるが、もう一つ大切なものを失っているかもしれない。

それが自然との共生のための思想や知恵を失うこと、すなわち仏教で言う「見濁」の現れである。文明の存続にとって物質を失うことよりも、思想や知恵を失うことのほうが大きな意味をもっているかもしれない。それは新たな文明が砂漠化や寒冷化などの環境の厳しい時期に興ることが、この反対のことを物語っているからである。すなわち人間にとって物質的な困窮は、思想や知恵がある限り、むしろ大きな変革を成し遂げる契機になるということである。これまで人間と自然との共生のための思想や知恵は多く知られている。たとえば、日本にも自然との共生のための規制や調整手段があった。環境民族学を提唱する野本（一九九二）は、日本の各地に数多く残されている民族伝承の中に人間と自然との共生の思想や知恵を多く見出している。たとえば、狩猟・採集資源の枯渇を防ぐための諺や伝承である。食料を恵んでくれる栃を伐るのも愚か者であれば、人の三世代を経なければ実を得られない栃を植えればすぐに収穫できると思うのも愚かであるという意味の「栃を伐る馬鹿植える馬鹿」という諺がある。

また、「キノコを採るときには一番初めに出一番大きいキノコをタネコとして残して来い」という伝承もある。また、成熟期・利用適期を待つて自然の恵みをいただくという思想がある。その代表的なものは、「口あけ」の思想である。これは現在で言えば、解禁日のことである。「口あけ」の思想は、直接的には、山や海の産物を共同体成員の間で公平に分配することを目的とするが、この習俗の根底には、「生育を折って恵みを待つ」という思想がある、と野本（一九九二）は指摘する。この他にも池や滝には大蛇、竜神、大ヤマメ、大ウナギなどの「ヌシ」がいた、という思想があった。そして人間が池や滝の水を汚せば池や滝のヌシがその場を立ち去る、という。そしてヌシが立ち去ると、池が消え去り、ムラは疲弊したとも伝えられている。これは「ヌシ」の方が先に住む住人であったことを意味し、人間はその「ヌシ」のすみかである土地の一部を割いて人間は住まわせてもらっていた、ということになる。いずれにしても人間はその生物の棲息場所を侵害してはならない、という倫理が働いていたということがで

きる。また、他の生物と「分け合う」という思想は、現在の東南アジアの熱帯雨林に住む焼き畑民にも見られる（高谷、一九九二）。毎年焼き畑耕地の決定をする、木の伐採と火入れをするが、その際にまず、森に作業の通告をする。そして、そこに宿っている神々や虫達に立ち退くことを頼む。そして稲の種をまき、やがて収穫期になる。その時には、魂をもつ稲に対して人間は氣を使わなければならない。そうしなければ、繊細な稲の魂はどこかにいつてしまい、稲が実らないからだ。さらに、収穫には順序がある。母稲を先ず最初に摘む。そして、それにはきれいな着物を着せて農小屋の最上段におき、その後稲の穂をつみとっていく。収穫が終わると、初稲を炊く。そして炊いた米を神々にご先祖、さらに犬、鳥、虫に分け与える。こうした共食が終わると、畑に行き、香を焚き、祭壇を壊し、最後に感謝を込めて、その土地は森に返す。ここでも他の生物の生息場所を侵害してはならないという思想が見られるが、それとともに、一時的に農耕の場を提供してくれる生物に対する平等性の表れとして、収穫

物を分け与えるという倫理性が見られる。またアフリカには、「私たちは私たちの親から地球を受け継いでいるのではない。私たちは子供たちからそれを借りているのだ」(ホイテ、一九九二)という、世代間倫理を表す諺もある。以上のような日本古来における伝承や諺、あるいは開発途上の民族における生き方に共通したものは、いずれも狩猟・採集・漁労・焼き畑農業といった生業に関わって生きる人びとの間に見られるということである。すなわち、常に自然と直接向き合っている人びとである。これらは、いずれも自然との密接な付き合いの中から生まれたものであり、これらは自然に対する平等性、公平性、謙虚さ、また世代間倫理に貫かれている。そして自然の再生・循環を考慮した思想である。また、その自然に対する倫理的行為が行われなければ、それは常に死活問題につながるという実存的な要求から生じる倫理であることも示している。先に述べた古代文明が減じた理由は、直接的には資源の枯渇であるかもしれないが、こうした思想や知恵を失うこともそれぞれの文明が減じた大きな原因の一つと考えられる。実際『ギルガメッシュ叙事詩』には「あの森に行くときたたりがある」との禁忌伝承が語られている(安田、一九九七)が、ギルガメッシュ王はその伝承を無視して森の神フンババを征伐する。そこにそのことが表れている。季羨林は、『東洋の智慧を語る』(季・蔣・池田、二〇〇二)で「二十一世紀への対話」(一九七五)でのトインビーの言葉、すなわち「仏教の依正不二とキリスト教以前のギリシャ、ローマの世界観は近い、あるいは似ていること」、「人類共通であった」依正不二を意識的に、しかも全面的に侵略する端緒となったものが、ユダヤ・神教であった、その結果「人間は自然観から切り離され、自然環境はそれまでもっていた神聖さを剥奪された」ことの重要性を指摘している。キリスト教以前のギリシャ、ローマの世界観が仏教の主体(正報)と環境(依報)の密接な関係性を表す依正不二と類似したものであったとの指摘は、ここで述べたことと関連して興味深く、今後研究していく必要がある。それでもう一つ大切なことは、いずれも自然の豊かなところで生まれていることを知る必要

がある。当然のことかもしれないが、こうした知恵は自然が破壊された後に生まれたものではなく、自然が豊かな間に生まれたものである。ではなぜ自然の豊かな間にこうした伝統ができるのか。それはおそらく、自然のありようを常によく観察し、なにかことがあれば、すぐに手を打つといった不断の観察と管理の結果と考えられる。なぜならば、豊かであるがゆえに常に自然に依存し、そのため常に接していることから自然のわずかな変化も熟知している。ゆえに、それを保つための智慧や工夫が生まれるからである。

五 仏教の描く文明像

鈴木(一九七八)は、宗教は風土が生み出した産物であるとの発想から、「天地万物が、永遠に流転を繰り返すと考えるか、天地にははじめがあり終わりがあると考えるか、人間の論理ではどちらかしかないであろう。前者は仏教の世界観であり、後者はキリスト教の世界観である。仏教を生んだのが森林であり、キリスト教を生んだのが砂漠であった」と述べている。なぜ仏教

は森林の思考の典型的な宗教といえるのだろうか。

確かに仏教は森林で生まれた。現在は岩肌のあらわなインドのブッダガヤであるが、かつて釈尊が悟りを得た頃はうっそうとした森林であったと考えられている。また、釈尊の涅槃の時には森の動物たちが集まってきたことが仏典には描かれている。さらに『ジャータカ物語』(津田直子、一九八五)には釈尊が過去世において動物として修行を積んだことも語られている。このような動物を主人公にした逸話が宗教経典に描かれているのは仏教だけであることも知られている(中村、一九八八)。

そこで実際の森林の持つ特徴と仏教思想との対応を考えてみることは意味があるだろう。まず、森林にはさまざまな生き物が生息している。これは、ブラジルのアマゾンの密林にでも入れればすぐに理解できる。植物、菌類、蘚苔類、昆虫、動物、鳥類など、実にさまざまな生き物が生きている。大切なことは、これらはお互いに複雑な生態学的な関わりをもち、生を営んでいることである。森林の中では、どの生き物も何らか

の役割もち、お互いの生がある。どの生き物が重要かを決めることもできないほど複雑な関わりがあるといってもよい。ちょうどこれは、仏典(華嚴經)に描かれている「縁起」の様相を表す「帝釈天の大網」に適切に表現されている。すなわち、生命を守り育む大自然の力の象徴でもある「帝釈天の宮殿に懸かる大網には、無数の結び目があり、そこに宝石(珠)が結び付けられている。そして、すべての宝石、他の宝石をきらびやかに映し出し、相互に反映し合っている」(季・蔣・池田、二〇〇二)との表現である。網の結び目がそれぞれの生物を表し、その関わりは複雑なほど網は安定する。そしてそれが「宝石」で表現されていることは、それぞれの生物の価値の高低を決めることができないことを表し、しかも互いの姿を映し出していることが、それぞれの生物を尊重し、それぞれの関わりを深さを示している。しかし、その網の目も一部が切れてくると、その安定性が失われ、大きな穴があくことに繋がる。さらには、ある場所が切れた場合に、次に切れる場所を特定することさえ難しく、また、一部が

切れることによって網全体が破れてしまうこともある。それが自然破壊による生態系の崩壊のプロセスでもある。実際、現在起こっている自然破壊による生物種の減少では、少数の生物種が減びることの影響はほとんどないようにみえる。しかしこのことの影響が将来どこに現れるかを予測することはきわめて難しいこと、またそれが原因で生態系全体が崩壊してしまうことから予測されていることと類似している。このように「縁起」の法門からは、生態系のあり様や、また崩壊へのプロセスさえも読み取ることができるのである。また、森林の生き物は常に生まれては死に、死んでまた生まれる。これはあたかも生命が生死を繰り返しているかのごとく見える。実際、生命が永遠に輪廻を繰り返すものであるかどうかは別にして、この様を生命の輪廻と表現したものとも考えられる。このようなことから、仏教思想の大きな特徴であり、また根幹でもある縁起、生命の平等性、そして生命の輪廻も、森林と大きな関わりがあることが理解できる。まさに仏教は森林の思考を持つ宗教である。そして同時に、森林

と深い関わりをもつ仏教思想の特徴が先に述べた人間と自然との共生の思想や知恵に通じるものであることも、重要な点である。

次に現代は科学技術文明の時代であることは、どのように捉えることができるだろうか。前に私は科学技術の特徴を仏教のもつ特徴と比較して、以下のような四つの視点から捉えた(山本、二〇〇一)。すなわち、科学技術は、①技術の産物は物質(物質主義)、②労働を省く(楽をする)、③時間を短縮する(効率主義)、④思うように動くもの(コントロールが可能)、の特徴をもつものに対して、仏教はその正反対の、①物質よりも精神の重要性、②煩惱即菩提、生死即涅槃など苦悩、勞苦こそ大切であること、③人間や自然が育つには時間が必要であること、④コントロールできないのが人間や自然である、という特徴をもっていた。

詳細はここでは省くが、まず仏教では、物質よりも精神を重要と考える。これは当然のことながら、物質が不要だといっているのではない。精神的なものを重んじるということである。これは文化や教育を重ん

じることに当然つながる。技術による労働からの開放は確かに魅力的で、その恩恵には大きなものがある。もちろんこれをすべて否定することはできないが、しかしあまりに楽なことばかり求めるようになることは、人間を墮落させてしまう。そして忍耐が無くなる。ゆえに仏教では、「煩惱即菩提」、「生死即涅槃」として、悩み、苦しみのなかにこそ真の人間としての生き方、幸福があることを主張する。また効率を科学技術はもとめるが、効率を求めることができないものが、人間であり自然の成長である。これは人間の成長を考えればよく理解できる。肉体的にも精神的にも、大人になるまでには、少なくとも二十年ばかりの時間が必要である。これはどうしても必要な時間であり、この人間の成長には科学技術は無力である。しかしやむを得ずば、こうしたことも科学技術の進展によって、忘れられがちである。最後に、思うようにコントロールできないのが機械であって、思うようにコントロールできないのが人間や自然である。特に生物にとっては主体性こそ重要だからである。

科学技術の産物が都市に集中していること、また仏教が森林の思考の典型であることから、都市と森林での人間の生活を比較することも重要である。都市は人間が計画的に作り出したものであり、人間が操作できる対象である。都市では建物、道路、線路などの建造物だけでなく、自然物である木なども意識的に配置している。それと比べて森林では人間が捉えることができないほど複雑に、それぞれの生物が無秩序に配置されている。ゆえに、いわば都市はコントロールが可能など単純である。都市はまさに人間が思うがままにコントロールすることを前提に作られたものであり、コントロールできるものである。しかし自然はそうはいかない。それほど複雑にできているのが生態系である。したがって、森林の特徴は、日本の里山の「手入れ」(養老、二〇〇三)の思想に見られるように、草木の生長は自然に任せることが前提で、不断の付き合ひによって、成長が行き過ぎたものは刈り入れ、成長のおぼつかないものは手助けをするといった管理の手を入れることが基本になる。そして都市では楽をするため

のさまざまな機械、エレベーターや車などで満ちているが、里山の「手入れ」には不断の忍耐や努力が必要である。そして都市では人間だけで生きているように錯覚するが、森林では人間は多くの生物の中の一つに過ぎない。ゆえに都市では人間の競争が起こりやすいが、森林ではそれぞれの生物間では一見競争原理が働いているが、全体としては共生と調和の世界である。その共生と調和のための知恵が先に述べた古来からの思想や知恵である。このように都市と森林での人間の生活は対照的である。ちょうど科学技術の特徴と仏教の特徴が対照的であることと対応している。このようなことから仏教の志向する文明像は、森林の思考をベースとする文明であることを示唆している。

六 まとめ

現在の自然破壊の状況は、どこから手をつけていいかわからないほど厳しい。既にすべてのものが悪循環に陥っている。このままいけば破局が待ち受けているだろう。そこで今、ハードランディングかソフトラン

ディングか、が問われている(石、一九九八)。ハードランディングとは、破局によって新たな時代が生まれることであり、ソフトランディングは破局の前に英知によって乗り越えることである。誰しもソフトランディングを望むであろう。しかし現状を厳しくみれば、むしろハードランディングになる可能性のほうが高いかもしれない。

季羨林は中国の諺「三十年河西、三十年河東」を取り上げ、人類の歴史上、万代に続いた文化は皆無であり、そして二十一世紀からは「河東」が「河西」に取って代わることに、さらに、西洋の科学は、自然破壊をもたらした深刻な結末を西洋の科学が救済することは絶対にできないこと、そして必要なことは、西洋文化の数百年にわたるあらゆる輝かしい功績を継承し、東洋文化の総合思考をもって西洋文化の分析思考の窮地を救い、全人類の文化をさらに高い、さらに新しいレベルに発展させることの重要性、を指摘している(季・蒋・池田、二〇〇二)。

仏教の目指す変革は、仏教思想の普及や教育を通し

ての変革である。すなわち急進的な変革ではなく、漸進的な変革である。それは「五濁」で見たように、「煩惱濁」と「見濁」が「劫濁」の時代の濁り、すなわち文明が滅びる要因と見ていることから窺われる。そしてその「煩惱濁」と「見濁」の変革を通して、現代文明を森林の思考をベースとした文明へと導いていかなければならない。しかしながら、既に述べたように「煩惱濁」は世界を席卷し、森林破壊に代表されるような自然破壊が暴走していること、また都市化や科学技術の浸透によって、世界的な規模で共生、調和、平等性、公平性といった人間と自然との共生のための思想や知恵が失われようとしている。それは文明の維持にとって、資源としての自然を失うことよりも重大な意味をもっているかもしれない。森林に代表される自然とそこに根ざす思想や知恵は、科学技術文明に替わる新たな文明の構築にとって、車の両輪のごとく両者は必要不可欠と考える。人間は豊かな森林や自然を失えば、それを意識することも、また豊かな思想や知恵を創造することすらできなくなるからである。

文献

- 池田大作・アーノルド・トインビー（一九七五）『二十一世紀への対話』文芸春秋社
- 石弘之（一九九八）『地球環境報告Ⅱ』岩波新書
- 梅原猛（一九八八）『ギルガメッシュ』新潮社
- 季羨林・蒋忠新・池田大作（二〇〇二）『東洋の智慧を語る』東洋哲学研究所
- クリストファー・フレイヴィン（二〇〇四）『ワイルドウォッチ研究会、地球白書二〇〇四―〇五』家の光協会
- 鈴木秀夫（一九七八）『森林の思考・砂漠の思考』NHKブックス
- 高谷好一（一九九二）『開発と持続の地球へ…豊かな森と焼き畑の人々と』聖教新聞、一九九二・五・二二
- 津田直子（一九八五）『ジャータカ物語』第三文明社
- 中村元（一九八八）『仏教動物散策』東京書籍
- 野本寛一（一九九二）『警句に込めた自然との共生』読売新聞、一九九二・四・八
- ホイテ、H.D.（一九九二）『リオへの道 開発途上国の前途』（山本修一訳）、東洋哲学研究、三十二巻、一六一―一七二
- 安田善憲（一九九七）『森を守る文明・支配する文明』PHP新書
- 安田善憲（一九九六）『総論1 森と文明』、所収『講座文明と環境 第九巻 森と文明』朝倉書店
- 山本修一（一九九七）『環境思想への仏教の寄与』東洋哲学研究、三十六巻、五七―七八

山本修一（二〇〇二）『科学技術に対する仏教の視点』東洋学術研究、四十巻、八一―九五

養老孟司（二〇〇三）『いちばん大事なこと―養老教授の環境論』集英社新書

（やまもと しゅういち／創価大学教育学部教授・東洋哲学研究所主任研究員）